

OFFICIAL SELECTION  
TORONTO  
FILM FESTIVAL  
2007

OFFICIAL SELECTION  
BERLIN  
FILM FESTIVAL  
2008

# A JIHAD FOR LOVE

A FILM BY PARVEZ SHARMA

PRODUCED BY SANDY DUBOWSKI AND PARVEZ SHARMA

映画『ジハード・フォー・ラブ』オンライン上映会

## パーヴェズ・シャルマ監督 インタビュー

2022年1月19日（水）17：00-19：45

---

主催：アラブ文化研究会（慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス）

科研費基盤 A「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」

2022年1月19日に映画『ジハード・フォー・ラブ』のオンライン上映会を、アラブ文化研究会とワタン研究プロジェクトとの共催で実施しました。この映画は世界各地の同性愛者でありムスリムであるという人々に焦点を当てたドキュメンタリーです。慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）で中東やイスラームの社会・文化を学ぶアラブ文化研究会が映画の字幕翻訳と上映会の運営を担い、上映会当日はイスラームと性的マイノリティーに関する研究発表も行いました。なお、字幕作成はイスラーム映画祭にご協力いただきました。信仰と愛を両立させるためにそれぞれの場所で「ジハード（苦闘）」し、あるいはそのためにワタン（Homeland）を後にせざるを得なくなった人々の姿を通じて、ムスリム社会のジェンダー問題や性的マイノリティーの人権、イスラームの伝統と現代的解釈のせめぎあいなど、様々な問題について考える機会を得ることができました。映画上映後には、自身もゲイ・ムスリムであるパーヴェズ・シャルマ（Parvez Sharma）監督がニューヨークからオンラインで参加し、事前に準備した質問や聴衆からの多数の質問に英語で答えてくださいました。その日本語訳をここに再録します。活発な議論にご参加くださった多数の方々に感謝いたします。

慶應義塾大学総合政策学部 山本 薫

## Parvez Sharma 監督

ゲイであり、ムスリムである。インド・ニューデリー出身。ジャーナリストとしてインドのメディア NDTVで働いた後、IndiaTomorrow, Central Television (英), The Discovery Channel (米) など制作・編集に携わり、2005年にはDemocracy Now! でプロデューサーを務めた。



1990年代にはインドの新聞記者として、国内のレズビアン経験の詳細を全国紙で初めて報道し、活動家としてもインド東部の西ベンガル州で初の組織的なLGBTQ活動の立ち上げに貢献。南アジアやイスラーム圏のLGBTコミュニティに関する国際的なパネルで講演も行っている。

映画製作には、ラジャン・コーサ監督による映画 *Dance of the Wind*（ロンドン映画祭観客賞、ロッテルダム国際映画祭最優秀アジア映画賞などを受賞）でアシスタント・ディレクターとして関わり、ピーター・フリードマン監督の *Silverlake Life*（サンダンス映画祭審査員大賞受賞）ではDVD制作のための編集・追加撮影を担当する。2007年公開のドキュメンタリー映画 *A Jihad for Love* はパーヴェズ・シャルマ監督の長編デビュー作である。その後2015年に、同じくイスラームと同性愛を描いたドキュメンタリー映画 *A Sinner in Mecca* を発表している。

# A JIHAD FOR LOVE

パーヴェズ・シャルマ監督が贈るドキュメンタリー映画 *A Jihad for Love*、2007年9月トロント映画祭にて初公開。英語・トルコ語・ペルシャ語・ヒンディー語・パンジャブ語・ウルドゥー語・アラビア語・フランス語と、国境、言語を超えて繰り広げられる壮絶なドラマに、思わず心を揺さぶられる。イスラームの聖典、クルアーンにおいて直接同性愛を禁止する言葉は存在しないものの、クルアーン内のロトの民（旧約聖書におけるソドムとゴモラ）の物語に基づいて、古くから「罪」とされてきた同性愛。同性に恋心を寄せる一方で、神から見捨てられたくない葛藤を繰り返す登場人物たち。そんな潮流の中、宗教とセクシャリティーに折り合いをつけ、なんとか未来に希望を保とうと「イスラームを信仰しながら同性愛者として生きることを選んだ人々」に光を当てた作品。

## 作品解説

映画は南アフリカで朝の礼拝を行うイスラーム学者ムフシン・ヘンドリクスから始まる。ゲイであり、ムスリムであることを様々なメディアを介して公言し、さらにはイマームとして勇気ある活動をする姿を映している。

続くシーンは、エジプトで同性愛者が大量に逮捕されたCairo52事件で有罪判決を受けたのち、フランスに亡命した青年マーゼンの葛藤やフランスでの新生活を捉えている。

マーゼンの新生活からシーンは一転。移民としてフランスで生活をおくるサナのライフストーリーを経て、サナ、マリアム、マーゼンが公園で同性愛とイスラームについての議論を繰り広げる。

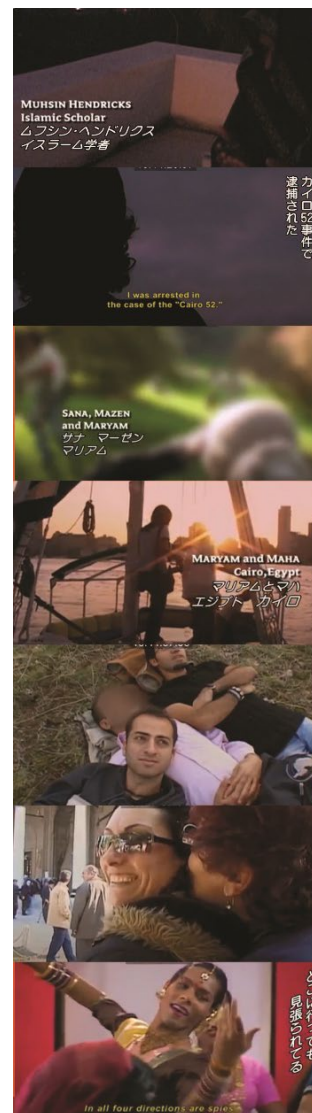
公園で議論をしていた登場人物の1人、マリアムに焦点を当て、マリアムとマハが互いに惹かれ合う反面、宗教とセクシャリティーがぶつかり合う現状を、マハの住むカイロで捉えている。

シーンは変わり、イラン人アミールの登場。同性愛を厳しく罰するイランやそこに住む母を恋しく思いつつも、カナダへの亡命を決意。難民申請のため、トルコに渡り他のイラン人ゲイ・ムスリム、アーシャム、パヤム、モジュタバと合流。

亡命を試みるイラン人4人のシーンの後、トルコ・イスタンブールにシーンは移り、スーフィズムを信奉するフェルダと恋人キーマットのレズビアンカップルを追う。

場面は南アジアに移り、ムスリム人口世界3位のインドでは、ゲイのカーシムとアフサンとともに、女装をするトランスジェンダーの世界が映し出される。

映画公式 HP: <http://ajihadforlove.org/press.html>



## パーヴェズ・シャルマ監督 インタビュー

聞き手：武井雛子（慶應義塾大学環境情報学部）

—— ムスリム・コミュニティの中にLGBTQの人たちはいますか？ また、そうした人たちがより快適に暮らすための情報はどのように得ているのでしょうか。宗教とセクシャリティーのバランスを取れるようになるための情報源というものはあるのでしょうか？

私達は異なる国に住む、異なる状況下で生活をする10億人以上のムスリムたちについて話しているわけです。映画『ジハード・フォー・ラブ』で見えていただいた様に、トルコのイスタンブールで暮らすフェルダとキーメトの状況は、エジプトで服役していたマーゼンの状況とは全く異なります。同性愛者であることを理由に投獄され、保釈中に逃亡してフランスに亡命せざるを得なかったマーゼンがいる一方で、南アフリカという比較的オープンな環境でゲイのイマームであると公言し、活動をしているムフシン・ヘンドリクスのような人もいます。ムスリム・コミュニティの中にもLGBTQの人々は存在しますが、そういった人たちを見つけるのはかならずしも容易なことではありません。ですが、21世紀においては、ソーシャルメディアの普及によって、人々が互いに繋がることはどんどん簡単になっています。

—— 映画が制作されてから15年以上経っていますが、その後、コミュニティ内で進歩や変化は見られましたでしょうか？

コミュニティでの変化に関していうと、私はムスリムを表現する上で「コミュニティ」という単

数形の単語を使うのに違和感があります。なぜなら、先ほども言った様に、10億人以上の信者を持ち、世界最速で拡大しつつある宗教を、1つのコミュニティと呼ぶことはできません。なぜなら、同じムスリムでも環境によって彼らの状況は大きく異なるからです。例えば、ISISが支配するシリアの状況は、現在では同性愛を許容するようになった法の下で生活するインドのゲイ・ムスリムの状況と非常に異なります。この様な変化は過去4～5年の間に起きました。繰り返しになりますが、ムスリム世界のどこにいて、どのような状況下に置かれているかによって大きく異なります。

—— 西洋社会では人権が必要以上に重要視されており、自分の性的指向を表現し遂行する権利もまた、集合的な善よりも個人の権利に焦点を当てた西洋の概念であるという考えについてはどう思いますか？

とても興味深い質問です。西洋社会で行われているLGBTQの自由拡大運動は、西洋独特の形でモデル化が進んでおり、それが多くの、様々なイスラーム的環境に、簡単には持ち込まれないと議論することもできるでしょう。西洋社会には、ムスリム諸国に住む同性愛者の人々が、西洋で規範とされている自由、正義、クイアの概念や、レインボー・フラッグを持ち、都市の大通りでプライド・パレードを行うといったことを今に取り入れるだろうという、ある種の思い上がりがありますが、それは非現実的な期待です。ムスリム諸国に暮らすムス



リムたちがその様になることはないと思いますね。

—— 映画の中で、登場人物たちは母親と良好な関係を築けているように感じられましたが、父親との関係はどの様なものだったのでしょうか？ 自らの子どもがゲイであると知った時、母親と父親の間で子どもへの接し方に対する違いは見られますでしょうか？

その通りだと思います。これはどの様な地域においても共通する問題だと思います。どの様な文化においても母親が母親であることに変わりはありません。母親がまず同性愛者である子どもを受け入れられるようになるのに対し、父親が子の同性愛を受け入れないことはしばしばあり得ます。また『ジハード・フォー・ラブ』の制作過程においても、意図したわけではないのですが、最終的に出演することとなった人たちは、母親ととても強い絆で結ばれている一方、父親との関係は希薄な場合が多く、出演者たちが父親について口にすることはありませんでした。

—— 同性愛者に対する意見が割れているとはいえ、どうすればムスリム・コミュニティーは内部にゲイやレズビアン・ムスリムのために安全な居場所を作ることができるでしょうか。同性愛が合法であると見なされない限り、それは実現不可能だと思いますか？

イスラームは場所によって変わります。イスラームは他に類を見ないほど順応性のある宗教です。どの程度まで実施されるかという点においても柔軟なのです。例えば、マレーシアのクアラルンプールにおける同性愛者の状況は、同性愛者であることが法的に「罪」とされ、死刑になる可能性のあるサウジアラビアのリヤドの状況と、全く異なりま

す。どの地域のどの様な状況下にいるかによるのです。私たちはInstagramやAIが発展し、今まで想像もできなかったような方法で人と繋がることのできるようになった時代に生きていますので、ムスリムの同性愛者の中に、西洋社会で使われている同性愛者を表象する名称で自らのことを認識している人々がいるのも必然的なことです。ただ、こういったことは当たり前ではないのです。イスラームの文化において、セクシュアリティについてオープンに話すこと自体一般的ではなく、ましてや同性愛について話すことは皆無と言えます。

—— 監督はセクシュアリティと宗教に対して悩みを抱えるゲイやレズビアン・ムスリムをサポートするコミュニティーを知っていますか？

『ジハード・フォー・ラブ』のオフィシャルウェブサイト([ajihadforlove.org](http://ajihadforlove.org))には、同性愛者のムスリムに役立つ可能性のある世界各国のオーガナイゼーションをリストにまとめているページがありますので、そちらを参照ください。

—— 映画では扱われていなかったバイセクシャルのムスリムたちの状況について教えてください。

映画の中でバイセクシャルの登場人物がいなかったのは、意図的ではありません。結果的にバイセクシャルのムスリムを撮影しなかっただけで、意図的でもなければ見落としたわけでもありません。とは言うものの、バイセクシャルの方が表立っては異性愛結婚をし、内密に自らの性的指向を追求できるといった意味で、異性愛社会の中に混じりやすいかもしれません。

—— イスラーム法では、犯罪行為があったことを証明するために4人の証人が必要とされています。その中で、同性愛行為を犯罪とみなすことは可能なのでしょうか。

非常に興味深い質問ですね。この問題はシャリーア(イスラーム法)の理論的解釈と神学的解釈によります。シャリーア法廷が同性愛に関する罪で裁判を行うことはめったにありません。確かに定期的に裁判が起こってはいますが、性行為が起こったことを証明するために4人の目撃者が立ち会わなければならないというスンナ派における規定があるため、日常的に起こっているわけではありません。シャリーアに忠実に従えば、同性愛を犯罪化したり、罰したりすることはより難しくなるはずなのです。ところがシャリーアを導入しているイランやサウジアラビアのような国家の宗教当局は、シーア派かスンナ派かに関係なく、4人の証人という規則を無視して同性愛者を平気で罰しているのです。

—— イスラームの歴史の中で、社会的に同性愛に対して寛容だった時期はありますか？

とても良い質問ですね。イスラームの歴史は、社会的に、特に芸術と文化の面において同性愛を容認するだけでなく、祝福もしていたことを示す例がたくさんあります。例えば、詩人アブー・ヌワースは、現在のイラクの地で、アラビア語で同性愛の内容を含む非常に際どい詩を書き、広く知れ渡ることとなりました。もともと、オリエントや東洋、イスラームと呼ばれる文化は、性に関して寛容であり性的少数派などに対してあまりにもオープンであると、西洋のキリスト教社会から非難の対象にされてきた歴史を持っています。

—— イスラームに同性愛の余地を作るための根拠となる聖典解釈についての質問です。映画でも言及されていた「同性愛禁止の根拠とされる聖書やクルアーン中のロトの民の逸話は」男性同士の合意の上での性行為ではなく、男性から男性への強姦行為を戒めているのだという解釈の他にも別の解釈はありますか？

もちろんこのほかにも解釈は存在します。しかし、それは英語でいうところの「構文解析」に帰着してしまいます。神学的重みのあるクルアーンの聖句が、一部を切り取られ、その意図は同性愛の否定にはないと論じるために、扱われてしまうのです。もちろん、そういった解釈を見出すことは可能ですが、映画にも登場した南アフリカのイマームのように、同性愛はイスラームでも受け入れられるという前向きな結論に誰でも行きつくかと言え、私は悲観的です。その手の意見が一般的になるとは思えません。ですので、ある意味では、私は自分自身の映画に少々、反対なのです。

—— これは私からの個人的な質問になりますが、監督自身もご自身の映画で同意できない点があったとおっしゃるならば、映画についてどこかを変えることができたらどのように変えますか？

変えられるとしたら、南アフリカのゲイ・イマームが述べていた様な、イジュティハード[自立的な聖典解釈]やオープンな言説が同性愛の「問題」の解決策であるという結論にはしないとします。それは逃げだと思うし、安易な答えになってしまいますからね。

—— 同性愛者の親を持つ子どもの心境について

ご存じのことがあれば教えてください。

映画に出てきた例に関して言えば、南アフリカのイマームは3人の子どもを持ち、彼らは幼い頃から父親の同性愛を知らされて育っています。でするので、同性愛者の父親を受け入れ、サポートする傾向があると思います。

—— 監督は同性愛を「受け入れる」ことをどの様に定義しますか。映画の中で、その子どもの一人が「ゲイの人は見つかったら、石打の刑になるんだよ」と父親の同性愛について冗談を言っているシーンがありました。それを受け入れていると見なせますか？

はい、私が撮影をした時、彼らはまだ幼い子どもでした。正確には、そのシーンで長女は「パパが石で打ち殺される時、痛みを感じないように一発目でしっかり死ぬるといいね」と言ったのです。このシーンは、映画の中で非常に感情を揺さぶる重要な瞬間を捉えたものとなりました。幼い子どもがイスラームの教えをかなりの程度まで内面化した結果、彼女は実の父親に対してそういった発言をしたのであり、父親が同性愛者であるというだけで暴力的な死を容易に想像することができたのだと思います。3人の子どもたち全員が父親の同性愛を間近で見て育ち、現在は父親が同性愛であることに對し、支える気持ちを強く持っています。

—— 映画を公開した当時、どのような反応がありましたか？ この映画を通じて批判や恐喝を受けたことはありますか？

もちろん、予想通りです。『ジハード・フォー・ラブ』に関しては、テレビや映画館、映画祭での上映

を介して現時点で、およそ800万人から900万人以上の人々がこの映画を視聴したとされ、TRPに基づいて計算された視聴者数は、非常に多いとされています。国によっては映画が上映される時には、物議が醸されることもありました。例えば、マレーシアのクアラルンプールで上映された時には、映画に対して抗議活動をする人々もいました。長年にわたり、ムスリム・コミュニティや一般的な同性愛嫌悪のコミュニティから、嫌がらせメールや殺害脅迫などをたくさん受け取ってきました。さらには、私に対して同性愛者であることを告発するファトワー[イスラーム法学に基づいた勧告]も発令されましたが、刑罰は執行されておらずご覧のとおり、私は生きています。

—— 「LGBTQ」や「同性愛者」という用語を性的マイノリティーのムスリムに対して使うことについてはどうお考えですか？

ムスリムは多くの異なる言語を話していますから、均一化はできないと思います。映画『ジハード・フォー・ラブ』の中だけでも8～9言語が使われていますが、これらの言語の多くには「レズビアン」、「ゲイ」、「バイセクシュアル」、「トランスジェンダー」といった、同性愛者であることを肯定する名称はありません。安易にすべてを「LGBT」とレッテル貼りする考えは、他の文化にうまく取り入れられることはないと思います。他の文化は、それぞれの言語、地理、社会的規範に基づいて独自の定義を考え出す必要があるからです。

—— 同性カップルが生物学的に生殖不可能な事実は、同性愛が犯罪と見なされる大きな要因を生み出していると思いますか？

その通りだと思います。良い質問ですね。キリスト教も含めて、すべての宗教において、同性愛は問題視されています。子どもは異性愛者間の結婚から生まれるのが正当であるという考えがあり、社会的にもこの正当な概念を全うすることが期待されています。したがって、それ以外のものは非難の対象になってしまうのです。

—— この映画を1つの国に限定せず、さまざまな国で撮影することにした理由は何ですか？

私にとってイスラームの多様性を示すことが重要だったからです。アメリカ同時多発テロ事件が起こり、その当時オサマ・ビンラーディンとジョージ・ブッシュがイスラームを代弁する人物であるかの様に扱われていました。私はそんなことになって欲しくなかった。だから、イスラームを表象する者は一人だけじゃないことを示す唯一の方法として、ムスリムの多様性を示すことが重要でした。

—— 男性同士の同性愛行為については、詩や寓話をはじめ、クルアーン内にも記述が見られます。一方で、女性同士の同性愛行為についての表現はないようですが、イスラームの歴史的作品の中でそういった記述はあるのでしょうか？

芸術、詩、文化的文脈において、女性間のホモエロティックな愛の言及やほのめかしはみられますが、伝統的にイスラーム社会が男性優位の文化になってしまったために、性的指向を自由に行使する、女性に与えられた権限は限られています。ですので、女性のセクシュアリティが女性自身の手によって実現されることはめったにありませんでした。

—— おそらく、これが最後の質問になると思います。ムスリムとして自らのセクシュアリティに苦心している若者たちにアドバイスをお願いします。

まずは『ジハード・フォー・ラブ』を見るべきですね。笑っていますが、半ば本気です。なぜなら、今日まで世界中の人々がこの映画に対して非常に前向きな反応をしてくれていることに驚かされているからです。映画ができて15年経った今、こんな議論をする必要はないはずなのに、それでも今日皆さんはここにこうして集まっています。映画はいまだに生々しく、議論が交わされているのではないですか。ですから、こういった映画を見て、若いゲイやレズビアン、ムスリムが自分たちの先にも後にも同じ様な人間が存在し、自分は孤独ではないということを理解することこそが、彼らにとって多大な助けになるでしょう。AIやソーシャルメディアが発展を遂げた2022年という時代の中で、色々な事がより楽になっていくだろうと思っています。



映画『ジハード・フォー・ラブ』オンライン上映会  
パーヴェズ・シャルマ監督 インタビュー

---

作成：ワタン研究プロジェクト

翻訳：武井雛子（慶應義塾大学環境情報学部）

レイアウト・編集：西道奎（京都大学総合人間学部）

発行：2022年3月23日

連絡先：プロジェクト・ワタン事務局

[projectwatan3@gmail.com](mailto:projectwatan3@gmail.com)

<http://www.projectwatan.jp/>